

委託事業実施内容報告書

令和4年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 【地域日本語教育実践プログラム】

実施内容報告書

団体名： 特定非営利活動法人フィリピンナガイサ

1. 事業の概要

事業名称	BAYANIHAN～みんなで地域をつくっていこう～
日本語教育活動に関する特定のニーズの実情や課題	1 在住フィリピン人の在留資格別状況の現在と今後(以下、人口動態の資料協力:浜松市) 2021年7月1日現在、浜松市の外国人住民数は25,711人である。そのうちフィリピン人は3,972人と、ブラジル人に次いで多く在留している。フィリピンについて言えば、いくつか特色がある。一つ目は在留資格別に見た場合、地位等類型資格者(身分系在留資格者)が全体の89%を占めており、主として家族の絆で定着している人が多い点である。そして2000年以降、日系人や子どもなど、家族の呼び寄せが進み、現在は「生活者として」日本に暮らしている外国人同士、または日本人と結婚して次世代が形成されている。 こうした状況のいっぽう、2021年11月17日のニュースでは「特定技能2号に、新たに11分野が追加されること」が報道された。家族の帯同が認められる特定技能2号が拡充されることになれば、現在の日系人のような身分系在留資格者が増え、将来的には、日本全国の至る所で特定技能の外国人が働くようになることが予想される。そして、彼らの家族の呼び寄せが始まるようになれば、これまで身分系在留資格者を受け入れたことのない地域でも、新たな「生活者としての外国人」の受け入れが始まる可能性がある。よって、地域社会の一員として取り込む「生活者としての外国人」とは今後、幅広い在留資格の人たちを捉えていく必要があり、当法人が設立以来辿ってきた道のりは一つのモデルケースとして、他地域にも還元できるのではないかと考えている。 2 世代や在留資格別、地域ごとに見た日本語習得状況の傾向 浜松市は南北に長く、面積も大変広い。さらに政令指定都市であることやアクセスの良さから、近隣市からも当法人を頼りに日本語学習、生活相談に来るフィリピン人が多い。ただし、私たちは同じ国にルーツがありながらも来日の時期・事情の分散と複数の環境要件を併せ持ち、様々な背景の人々が混在していることを把握し、対応している。なぜなら、彼らを日本社会の中に埋没させないためには、個々のニーズとレディネスを捉えること、それぞれに適した形態で集まれる場所の提供をすることが欠かせないと知っているからである。ここではフィリピン人の中でも比較的よく見られる、属性ごとの日本語学習の状況・能力について記すと同時に、浜松市の中においても地域ごとに特色があることを述べる。 ① 日本生まれ日本育ちの若い世代(学齢期) 来日直後は学校生活に戸惑い、授業についていくための日本語に苦労するが、やがて馴染み、成長していくことになる。 ② 学齢期を超えて来日する若い世代(学齢期超) 成年年齢を18歳に引き下げることと内容とする「民法の一部を改正する法律」が2022年4月1日から施行される影響が少なからずあり、日系人家族の子供の呼び寄せ(駆け込み需要)が増えている。特に16歳～17歳の年齢での呼び寄せは相変わらず多いのだが、彼らは来日後に所属する先がない。そのため、社会の仕組みを学び、経験する機会を得て、日本での生活をスタートさせる支援と、進路についての相談をする場が必要とされている。現在、コロナ禍においても来日は微増している。 こうして新たに来日するケースが続くいっぽうで、数年前に来日した若者たちは、次々と日本社会を支える年代に差し掛かっていることも忘れてはならない。現在彼らは日本

社会から一定の日本語レベルを求められ、もがいている。それは、「会社から JLPT の N2(あるいは本人の現状のレベルから、まずは N3)を取るように言われたから、日本語を教えてほしい。受験のやり方を教えてほしい」というものである。このような問い合わせは市内に留まらず、西は豊橋市、東は御前崎市辺りからも相次いでおり、私どもの教室から一度は巣立ったものの彼らの人生において再び頼りにされているという状況である。まとめると現在、当法人が抱える若い世代は、10 代半ばの来日直後の者から、20 代を超え定住するに至った人まで、レベルもニーズも違う人々ということになる。この状況を踏まえた新しい学習の機会・場の提供が必要であるが、その具体的な支援内容は社会の一員として通用するため、生涯にわたる自律的な学習機会の提供・促進だと考えている。

③ 滞在年数の長い中高年、とくに女性が多い

1990 年代、興行の在留資格で来日し、夜間、飲食店に勤めた女性たちが現在、中高年に差し掛かっている。今も飲食店に勤務している人もいれば、工場に転職して何年も経つという人もいる。この人たちの強みは日本での暮らしについて、経験から推測する力があることである。また、読み書きへの苦手意識は強いが、聞くことと話すことには長けていることが多い。こうしたことから、日本での生活も日常的なことであれば「なんとかなっている」という状況にある。しかし、高度な日本語力を要するような場面、たとえば労働関連や重要な契約、社会保障といった内容では理解が難しく、自己実現を目指す上では障壁となることもある。彼女たちは「来日後、時間的な余裕も、自身のキャリアを積めるような土壌もなかった。クチコミで職を転々としてきた」と語る。ただ最近ハローワークへ問い合わせると、フィリピン人の利用者が徐々に増えていると聞く。私たちの活動における実感として、フィリピン人は中高年であっても女性が働き手として家族を支えているケースもよくあり、とくにコロナ禍において今の業種・職種では出勤日、収入が不安定なため、転職希望者が増えているということがある。実際、彼女たちからよく聞かれる転職希望先には、「英語の先生」「通訳」「ホテルのフロント」「スマートフォン販売」などがあるのだが、いずれも「接客での経験を活かしたい」という思いに通じている。このことから、「日本語教育の参照枠(報告)(文化審議会国語分科会 令和 3 年 10 月 12 日)」のうち、彼女たちが得意な「話す力(やり取り)」「聞くこと」を使って、いかに社会の中から求められる課題遂行に導くかが地域の日本語教室の新しい役割に追加されたと考えている。

④ 日系フィリピン人の存在

日系フィリピン人は日本語能力が高い人に頼って生活していることがある。浜松市は全部で 7 つの区があり、冒頭述べた約 4,000 人のフィリピン人のうち、実に 1,014 人は浜北区在住であるが、中には一戸建てを構え、永住の意思があることがうかがえる点も注目に値する。さらに詳しく分析すると、彼らのほとんどが親族関係にあることにも驚かされる。一世以降、各世代に兄弟が多かったのも、世代が進むごとに巨大なコミュニティが形成されたのだと推測される。現在は派遣会社が用意する車で職場まで往復している人もいれば、一族の中で世代が進み、日本の高校を卒業した者が一家の通訳的な役目を担っていることもしばしばである。結果、日常生活の中で日本語がわからなくて困ると感じることが少なく、日本語学習の必要性をあまり感じてはいないと思われる。この人たちについて、当法人では日本語学習以前に、地域社会と希薄なことを憂慮している。それは、この地区がフィリピン人からの相談よりも日本社会側からの相談のほうが圧倒的に多くなっていることに起因している。寄せられている相談を一部挙げると、「保護者と意思疎通ができないため、子どもの様子がわからないので保育や教育活動に影響が出ている(幼稚園教諭より)」「近くに免許センターがあり、住民票を取りに来るフィリピン人がとても多いが、窓口のやり取りがうまくいかない(協働センター職員より)」「自治会の説明がうまく伝わらず、会費集めや活動への参加が滞ってしまう(自治会より)」といったものがある。また、「人材不足のため、フィリピン人で働いてくれる人がいないか」「自社の売上を伸ばしたいので、フィリピン人を顧客にしたい」「うちも日本語教室を立ち上げたので、フィリピンナガイサの教室と連携したい」といった内容まで、相談は多種多様であるが、彼らのコミュニティの結束が固く内向き傾向のため、両者を結びつけることがなかなか進展せずにいる。そのため、フィリピンの人たちの気質や背景をよく知っている研

	究者・専門家の協力を得て、いかにして結びつきをつくるのか、他の課題に埋もれないよう「特定のニーズ」として拾い上げることをしていく必要を感じている。この地区のように、一つの国で似た属性の人々が集住するケースは全国に点在していると見受けられるので、他地域の参考になるような先行事例を作っていけるとよい。 ⑤ 就労系在留資格者 人数は多くないが、近年、当法人の週末の教室に就労系の在留資格者が受講するケースが出てきている。当法人がこれまで身分系在留資格者に対して行ってきた日本語指導、生活相談等の経験から、引き続き対応していきたい。また、在住歴の長い身分系在留資格者の中にも知見、素養を生かした人も現れているので、外国人コミュニティとして、そのメリットを活かした教室運営に努められるものと考えている。 3 非常時における情報発信と収集について 昨今、自然災害、新型コロナウィルスをはじめとする「非常事態」に見舞われることが増えている。このような非常事態にあたっては、全ての人々にとって情報収集、知識、備えが必要である。日本社会の入口としての機能を持つ私どものような外国人コミュニティは彼らに対しての単なる情報提供者ということではなく、その存在意義が多岐にわたると考えている。例えば、教室活動では自治体等から出された情報そのものを教材に取り扱うことで、「今、真に必要な」学びを提供することにもなる。また、ここに日本人参加者を取り込むことで、「ともに学び合う仲間(協力者)」としての意識を醸成することにもつながっていく。地域日本語教室は、単に外国人に日本語を教える場という機能を超えていく時代に突入している。 4 本事業での経験と特色を生かした人材育成 さて、こうして多様なフィリピン人をはじめとする「生活者としての外国人」を支援するために必要な知識やスキルは多岐にわたる。しかし、端的に本事業の人材育成を目指す人物像を述べるのであれば『生活者としての外国人』を日本社会に結びつけられる人「柔軟で応用が利く人材」や、『ことば』を使って、『生きる力』を醸成する場づくりができる人材」ということになる。理由はいくつかあるが、一つは先に述べたように、この法人は「家族単位」でのかかわりが深い上、その人の人生の中で節目や必要性があれば頼りにされ、何度でも戻ってこることが挙げられる。また日本は欧州評議会の CEFR を基にし、「日本語教育の参照枠」を作成する段階に入ったが、ここに書かれている「目指すもの」を見ると、学習者個人の能力(日本語の熟達度)と、社会が歩み寄るという寄せ方で、社会構造を維持していくと読み取れる。そのため、学習者にどのように向き合うかはもとより、指導者自身が社会とどのように向き合うか、あるいは学習者と社会をどのように結びつけ、自身はどのように関わるか、関わるすべての人たちの人生を豊かにすることを常に考え、カリキュラムにしたり活動に結び付けたりすることができるか、そのような大変高度で込み入った領域まで踏み込んだ育成が求められている。私たちは社会の中に、「多様な人材がともに暮らす社会について」真剣に考える人づくりをし、それを全国に波及してもらわなければならないと考えている。 5、時代に即した団体のあり方 本事業を受託して 10 年以上の歳月が経った。近年、国策として、外国人受け入れ状況は激動の時代に突入したが、だからこそ、我々は活動を通して様々な関わりが「定住外国人向け」といった動きに変わってきていることを実感している。これまでは外国人の自助努力団体として身分系資格者の声を拾い上げることを得意としてきたが、今後は在留資格の枠を超えて、また、日本人と外国人という垣根も超えて、問題点や困りごとが社会に埋没されないよう、つばさに見ていかなければならない。
事業の目的	定住フィリピン人がコミュニティ内に埋没するのを防ぐこと。 ・文化庁日本語学習動画サイト「つながるひろがるにほんごでの暮らし」を使って、体験と地域住民との交流を通じた日本語教室を展開し、日本社会の中で「できること」を増やすこと。

	・公的機関が発信する「やさしい日本語版」の生活情報をレアリア教材に取り入れ、周知を図ること。 ・いずれの教室活動の中でも自律学習のアドバイスを取り入れ、教室の外でも学習者が学べる力をつけること ・フィリピン人が集住する地区に教室を設置し、生活情報を題材に地元住民との交流を図ること。 ・公的機関、企業、住民等に連携を働きかけ、多様化している外国人の来日背景や在留資格などの状況を、地域全体はもとよりオンラインを使って全国規模で理解できるよう普及を図ること。
事業内容の概要 (課題をどのように解決したのか、どのような点が先進的な取組であったのか分かるように記載)	「日本語教育の参照枠(報告)(令和3年10月12日)」に挙げられる言語教育観の3つの柱「1、日本語学習者を社会的な存在としてとらえる」「2、言語を使ってできることに注目する」「3、多様な日本語使用を尊重する」に着目し、これら教育観を具体的な取組事例として示すよう取り組んだ。 取組1:運営委員会…本事業の総括として設置、運営した。 取組2:バヤニハン日本語教室(①中区クラス ②浜北区クラス)…言語を使ってできることに注目し、社会で求められる課題を遂行できるようにした。 取組3:バヤニハン～みんなで地域をつくっていこう～…本地域内での連携を図ることを目的とし、住民に対して在留外国人を社会的存在としてとらえることへの理解を促した 取組4:バヤニハン～みんなで全国に広げていこう～…本事業がロールモデルとなり、全国に普及できるように図った。 取組5:バヤニハン～私たちの地域の特定のニーズをとらえよう～…フィリピンコミュニティの中でも、やや内向き傾向にある浜北地区在住フィリピン人たちと日本社会をつなぎ、「社会的存在としてとらえる」ために必要な事務局のタスクを、専門家とともに整理した。しかし、事業の途中で検討する地区を浜松市全域に拡大した。理由は、すでに浜北地区のフィリピン人コミュニティが浜松市中区の取組に根強く存在していたからである。
事業の実施期間	令和4年6月 ～ 令和5年3月 (10 か月間)

2. 事業の実施体制

(1) 運営委員会

実施体制	日本語教育に関する有識者をはじめ、外国人の生活相談に精通している方、行政職員など10名で構成し、3回にわたり本事業の実施状況の確認、改善、当該事業への助言、成果に対する評価などを話し合った。 実施期間中、全3回にわたり委員会を執り行った。 ② 前半…事務局から事業趣旨を説明し、それを受けて委員よりご意見、助言をいただいた。 ②中盤…進捗報告、改善点に対する意見交換を行い、助言をいただいた。 ③後半…事務局より令和4年度の報告をし、まとめとして評価をいただいた。次年度以降の事業継続の可能性を見据えて、議論した。
------	--

(2) 地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制	【取組1】運営委員会 地域連携の観点と当法人が把握している諸課題から委員を構成した。フィリピンをはじめとする「生活者としての外国人」に関わりある公的機関(静岡県経済産業部…就労/浜松市国際課…生活全般・共生社会/浜松市教育委員会…教育)、そして社会保障の立場から土業の先生方(弁護士、行政書士)、日本語教育の知見から大学教授、若者の発達に関するご助言として臨床心理士、さらに防災やシビックプライド(都市に対する市民の誇り、愛着)についても検討したく、各方面の専門家からご意見・評価を賜った。
------	---

	【取組2】バヤニハン日本語教室(中区クラス・浜北区クラス) ・中区クラスは地元住民や、かつて当法人で日本語学習者として通っていた若者に、日本語支援としての教室補助の協力をお願いした。 ・浜北クラスは地元住民等(おもに日本語教員養成課程の大学生、学習者の雇用主)と連携を図り、円滑なコミュニケーションに結びつく実践的な教室活動を展開した。 【取組3】バヤニハン～みんなで地域をつくっていこう～ 本取組においては「日本語教育参照枠」の「多様な評価」への理解が深まるよう、主に企業と連携して取り組んだ。「フィリピン語スピーチコンテスト」は、浜松市最大級の国際交流イベント「グローバルフェア」において実施することで、参加者への周知・動員を図った。また、ハイブリッド開催にしたことで、参加者の地域も全国に渡った。なお、フィリピン語スピーチコンテストは共催・浜松市、後援には(公財)浜松国際交流協会(HICE)ほか、浜松市教育委員会にもお願いした。 【取組4】バヤニハン～みんなで全国に広げていこう～ 浜松市は、市民活動を大切にする土壌をもっている。当法人も例外ではなく、浜松市との連携により活動の実績を築いてきた。このような事例を全国の自治体や市民団体に普及した。また、日本語教育人材が自己理解と職業理解が深め、一層の専門性について考えられるような講義を実施した。 ※本取組は共催:浜松市、後援:(公財)浜松国際交流協会にお願いした。 【取組5】バヤニハン～私たちの地域の特定のニーズをとらえよう～ 本プログラム上限3年の中で、定住フィリピン人が多い当該地区の「浜北区」に焦点を当て、特定のニーズを捉えていくつもりだったが、取組を進めていくうちに、浜北地区のフィリピン人がすでに浜松市中区にコミュニティを形成しているのではないかという結論に至った。当法人は、浜北区をはじめ市内各地にフィリピン人が増えていることにより、例えば地元幼稚園、企業などから様々なご相談を受けてきており、このことは今も変わらず続いている。専門家や関係者を交えて、実情の把握や不十分なリソース、橋渡しの具体的な方法等について検討するため、委員会を設置した。
--	---

(3) 中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制

実施体制	半場和美 …全取組の整合性を図りながら、内部と外部(文化庁、行政、地域の関係機関や住民、本事業担当者)とを調整し、地域連携の促進に努めた。円滑な事業遂行のため、全体の指揮を執った。 松本義一 …主に「バヤニハン日本語教室」のコーディネートにあたった。 鈴木エバ …主に「バヤニハン日本語教室」では指導者を、運営委員会では委員を務めた。
-------------	--

3. 各取組の報告

特定のニーズに応じた日本語教育の実施日本語教育の実施 【名称:バヤニハン日本語教室～みんなで地域をつくっていこう～ ①中区クラス ②浜北区クラス】	
取組の目標	【中区クラス】 ・多様なニーズをとらえ、対応すること。また生活情報、災害をはじめとする非常時への備えに関する情報提供をすることで、自律的な学習の機会を提供する。

	【浜北区クラス】 ・取組5と連携し、本取組の評価を仰ぐ ・本取組を通じて積極的に「生活者としての外国人」と住民の接点づくりに努めていく。これによって、本地域性に即した多様な評価の土壌を育てていく。		
内容	【中区クラス】 支援者に協力を仰ぎ、学習者の個別学習に寄り添っていただくとともに、折に触れて事務局から下記の学習内容を提案したり、提供したりした ・個々の学習者に求められる課題を遂行できるよう、自律学習や体験学習を促した ・必要に応じて生活情報提供や非常時への備えに関するグループワークを実施した ・日本人、フィリピン人の地域住民、大学生や高校生にあたってもらうことで、国籍や年齢の垣根を超えた支援体制を整えた。 【浜北クラス】 初回、「つながるひろがるにほんごでのくらし」のウェブサイトを紹介し、その中から、学習者に勉強したいテーマを聞いた。挙げたテーマは下記の通りであり、これらを学習した。 ・レベル1 シーン 2-1「〇〇はどこですか」 ・レベル2 シーン7「だれでもさんかできますよ」 ・レベル2 シーン 10-1「じゅうみんとうろくのでつづきをおねがいします」 ・レベル3 シーン 2-2「どのくらいかかりますか」 ・レベル3 シーン 3-2「じてんしゃのとうなんがおおいみたいですよ」 ・ポートフォリオを振り返る 【中区・浜北クラス】いずれの教室も、学習者のライフステージに寄り添うことを基本姿勢にした。多くの人が集い、慕いやすい場を提供することで、コミュニティと日本社会の「ハブ」としての役割を担った。		
実施期間	令和4年6月6日～令和5年3月18日	授業時間 ・コマ数	中区クラス 2時間×30回 浜北クラス 2時間×8回
対象者	おもに日本語を学びたい定住フィリピン人(ただし、在留資格、国籍を制限はしていない)	参加者	総数 102 人 (受講者 76 人、指導者・支援者等 26 人) ー内訳ー 中区 69 人(受講者 53 人、指導・支援者 16 人) 浜北33 人(受講者 23 人、指導・支援者 10 人)
カリキュラム案活用	I 健康・安全に暮らす(小分類01,02,03,04, 05) II 住居を確保・維持する(小分類06) III消費活動を行う(小分類08) V子育て・教育を行う(小分類15, 17, 20, 21) VI働く(小分類22, 28, 30) VII人とかかわる(小分類31,32) VIII社会の一員となる(小分類33, 34, 35, 36) IX自身を豊かにする(小分類38, 39, 40, 41, 42, 43,44) X情報収集・発信する(小分類46)		
使用した教材・リソース	文化庁日本語学習動画サイト「つながるひろがるにほんごでのくらし」 浜松市「ひらがな・カタカナれんしゅうちょう」 オリジナル教材(当法人が作成したもの) 静岡県「避難生活」ガイドブック 自転車譲渡証明書		

受講者の 出身（ルーツ）・国 別内訳 （人）	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インド ネシア	ペルー	フィリ ピン	日本
							浜北区 4人		中区 53人 浜北区 19人	

（１）特徴的な活動風景（２～３回分）

取組事例①

【中区クラス:第4回 令和4年7月9日】中区クラス:防災マップをつくろう

当法人が同日・同時刻に主催している「ハロハロ教室(浜松市内小中学生のフィリピンにルーツをもつ児童生徒対象)」の保護者や兄・姉がこのクラスに学習者として参加している。支援者にはかつて同クラスに通っていた、現在は高校生、大学生になった先輩たちがあたっている。この日は地元の日本人大学生にも参加を呼びかけ、みんなで防災マップを作成した。自宅近くの避難所の確認や、非常時への備えについて話し合い、グループで考えをまとめたり発表しあったりした。



取組事例②

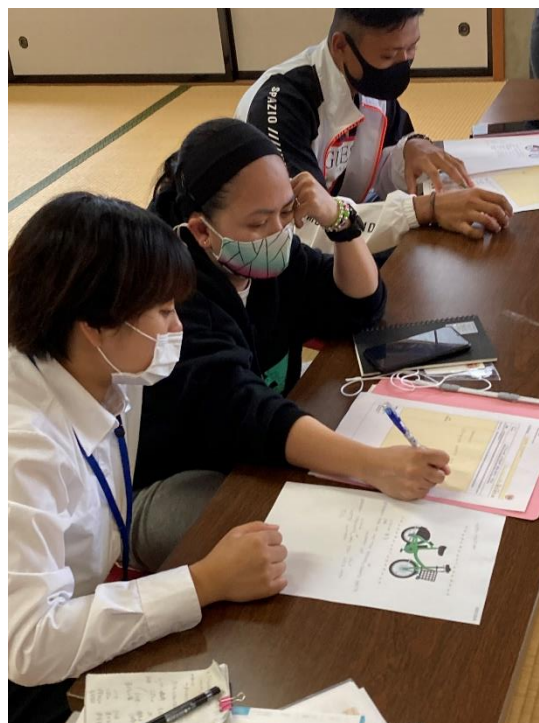
【浜北区クラス第3回 令和4年10月8日】自転車の盗難がおおいみたいですよ(つなひろ)

「つながるひろがるにほんごでのくらし」のうち、レベル3-2「じてんしゃのとうなんがおおいみたいですよ」を導入に使った。アンジェラさんのように「え～、そうなんですか」を色々な声のトーン、目の表情でやってみたり、自転車が盗まれないための工夫をグループワークで考えて、互いに質問したりアドバイスし合ったりした。これにより、関連語彙や表現がたくさん出てきた。例えば、
・駐輪場、届出、防犯登録、防犯ブザー、ツーロック、防犯カメラ、防犯ブザー、人通り、保険、カバー
・「ブルーシートをかけて、虎ロープで縛るといいですよ」…工事現場に従事する技能実習生たちから、クラスの皆へのアドバイスとして。日常の業務の中で使えるものを応用して考えるというアイデアには脱帽した。定住者とは違う彼らの職務について、クラス皆が知る機会にもなった。
・自転車の鍵について…「しめる」「かける」「つける」というように、学習者が日常生活で使っている動詞がたくさん挙げられたので整理した。

これらを話し合った後、ポスターにまとめて発表した。また、ボランティアの方がこの日のテーマに合わせて「自転車譲渡証明書」のサンプル書式を持ってきてくださったので、それも教材として活用した。自転車を他人に譲渡したり、譲り受けたりした場合には持ち主の変更届や保険加入の必要があることや、それらは街の自転車屋でも取り扱っているという情報もあわせて提供することができた。

今日のテーマは外国人にとって大切な内容だと思います。というのも、自転車を日常的に使用していて、ルールや安全面の理解がとても大切だと思うからです。(来日1か月の技能実習生のポートフォリオ)

名前 (Name)	じけんしゃの とうなんが おおいきたい ですよ Kelainannya banyak terjadi kecelakaan sepeda.
目標 (Goal)	Dapat bertanya tentang langkah-langkah pencegahan kecelakaan seperti cara mengemudi sepeda. Dapat memahami penjelasan dan cara mengemudi sepeda.
メモ (Memo)	ちゆう りん じょう 馬主 車輪 場 どうふん = どうろふ かどを つける かどを しめる かどを あんて つけおいた かどを つけた はが いでます } アドバイス とどけを出した 防犯 : はつがん : PENCEGAHAN KEBERKALATAN
感想 (感想文) (Comment)	PELASARAN HARI INI TENTANG SEPEDA SANGATLAH PENTING BAGI ORANG RING KARENA SETIAP HARI DIGUNAKAN DAN SANGAT PENTING DAN JUSA BANYAK PERATURAN DAN KESELAMATAN YANG HARUS DIPAHAMI.



(2) 目標の達成状況・成果 (取組による特定のニーズの充足)

【中区クラス】

このクラスは日本語教室でありながら、子どもの呼び寄せをはじめとする相談の場であり、また同胞と過ごせる場としての機能も持っている。そのため、今年度はとくにインテーク面談(初回面談)や情報提供の重要性と、日本語学習機会の提供が補完関係になるような運営に努めた。具体的には、相談窓口としての機能(コーディネーターが専任者としてあたる)と、個別学習のための複数グループ(地域住民や、フィリピンにルーツを持つ高校生・大学生を支援者として)を併せ持つ形式で実施した。これにより、インテーク面談(初回面談)から日本語学習のグループに移行し、毎週、中区クラスに通うようになった者もいれば、それぞれのグループにおいて、日本語学習の合間に支援者や仲間に生活上の悩みや相談を気軽に打ち明けられることを励みにして通う者もいた。こうして家族・親族、友人たちと、県内外から複数人で車に乗り合わせて教室へやって来るといったケースが、毎週のように続いたが、彼らのライフ・キャリアに継続して関わったことが、日本語教室の機会拡充に至った。なお、支援者には高校生以上のフィリピンにルーツを持つ若者を中心に起用したが、彼らを頼りにして毎週のようにやってきたのは、彼らより少し上の世代(20代~30代前半)と、彼らの母世代(40代半ばくらい)だったことが特徴的であった。「私はこの支援者に付いてほしい」という、若い彼らにそれぞれのファンが付くような形で、学習者が頼る姿が多く見られた。日本人支援者については、この教室の担当をきっかけにして、当法人のそれ以外の活動、とりわけ国際交流活動にも足を運んでいただいた。このことは学習者との関係性づくりに大いに寄与していただいたものとする。

【浜北区クラス】

① 学習者について

浜北区は浜松市に暮らすフィリピン人のうち、約25%にあたる1,000人が在住している。このことから、ここに暮らすフィリピン人の参加を見越して教室を設置したが、実際にはこの方々の参加はほとんど見られなかった。理由は、この地区は若い世代に移行しつつあること。その若者は街なかで行われる中区クラスへの参加に集中しており、すでにそちらにコミュニティができつつあることが考えられる。しかし、このクラスの特筆すべき点は、学習者の多くが本取組に先立って実施された浜松市体制づくり推進事業からの継続参加者であったこと(本取組の開催日時を浜松市と連携し、調整した)、また住まいが中区でも浜北区でもないフィリピン人の学習者で車を所有している者が、駐車場が広い浜北クラスを選択するということが見られたことであった。この中に、インドネシアの技能実習生という国も在留資格もこれまでとは違った属性の学習者を含んだことも新規点となった。なお、実習生たちが所属する企業は、浜

松市外国人材活躍宣言事業所の認定も受けており、このような新しい連携から本取組の広げ方にヒントを得た。この事例を受け、今後は浜北地区に多い機械金属工業組合(技能実習生を多く受け入れている)と連携した動員拡大を検討できるのではないかと考える。

以上、事務局が想定していた学習者の背景とは違ったが、地域日本語教室の窓口を複数設置したことは新しい層を取り込み、日本語学習機会の提供の拡充につながった。

② 指導者・支援者の育成・研修の場として

今年度、浜北区クラスでは静岡県立文化芸術大学の日本語教員養成課程の実習生を受け入れた。もともと事務局はこの事業に初任段階・中堅段階の指導者を配置していたことから、文化庁が「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)改訂版(平成31年3月4日)」に示した養成・初任・中堅の各段階の指導者が集まることになった。これらの指導者がチームティーチングの手法で指導にあたり、グループダイナミクスを教室運営に取り入れた。このように、「コミュニケーションを通してコミュニケーションを学ぶ」という指導者としてのあり方の経験は、「住民同士の接点づくり」という地域日本語教育の目的・役割・意義についても注意が向き、OJTによる指導者・コーディネーター育成としての役目も果たした。ここに、地域住民を取り込めるような土壌ができたのではないと思う。

なお、このクラスでは「教案の型(どの段階の指導者でも、骨組みに沿って進行できるもの)」と「ポートフォリオ」を軸に据えて、学習者の学びと教師の成長を「見える化」した。これによって、準備や振り返りの段階でも、各指導者間で共有しやすいように工夫した。

③ ポートフォリオについて

ポートフォリオの導入について良かった点は、学習者が自身の学びの記録し、見える化した後の行動変容につながったことであると考え。例えば、ある学習者が授業のスピードについて行かぬため、ローマ字でポートフォリオに記入していたが、次の授業の時には自宅で余白に平仮名や漢字で埋めて持ってくるということがあった。また各回、ポートフォリオを記入するだけでなく「ファイリングする時間」も設けた。授業前や休憩時間にそのポートフォリオを嬉しそうにめくりながら、学習者と支援者が談笑する姿も多く見られた。安心した場で行われる、こうした関係性づくりが学習者の能動的な学びへの後押しにもつながり、(公財)浜松国際交流協会が発行する「漢字練習帳」を購入し、自主学習に使う者や、JLPTの受験を目指す者が現れたりした。お子さんが成長し、不要になった漢字ドリルを持って、教室へやってくる学習者も出始めた。さらに、ある学習者は市役所のテーマに関するスクリプトを授業で作成した後、ポートフォリオで「市役所の人と話せるようになりました」と振り返っている。よって、ポートフォリオへの記録そのものが学習者の自己成長にとって良かった。さらに、このポートフォリオを間に据えて、教師たちも指導のあり方をチームで振り返ることができ、研鑽につながった。

(3) 今後の改善点について

・生活相談に支援が偏り過ぎると日本語教育として認められ難いという事業評価を受けることもあるが、彼らにしてみると日本語学習の機会を獲得することそのものが相談だと捉えることもできる。しかし、それは学習者本人の中で潜在的であり、自覚されていないこともしばしばであることから、いかにしてこの点に寄り添うかが、コーディネーター・教師の資質に求められる。

・浜北区にはフィリピン人の定住が長期化、生涯にわたっており、人数も1,000人を超えている。これは、浜松市のフィリピン人の約4分の1に相当する人数である。このことから、当法人は「浜北地区に日本語教室を設置する必要性」を訴えてきた。しかし、彼らの世代交代が進んでおり、同地区の若者は当法人が主催する中区バヤニハン教室にたくさん参加している。既に、そちらのコミュニティを中心とした浜北地区在住フィリピン人のネットワークができている。これを仮に浜北地区へ移転するよう図った場合、中区クラスのコミュニティと二分することになる上、中区クラスのコミュニティ規模の維持に影響を及ぼしてしまう可能性がある。このことから、すでに自然発生的に存在している中区クラスの浜北在住フィリピン人たちを中心としたネットワークを維持・形成することが良いと考えるに至った。いっぽう、浜北区クラスの新しい参加者として見込む層の一つとして、自治体主催する日本語教室との連携(具体的には、浜松市体制づくり推進事業との連携)による国籍、在留資格の枠を超えた人たちが挙げられる。いずれにしても、当法人は中区、浜北区ともに重要なエリアだと捉えており、従来中区クラスで取り込んできた方々と浜北地区在住フィリピン人の両方を取り込むことで、フィリピン人たちがコミュニティに埋没しないよう、今後も引き続き取り計らう。

取組の成果の発信や普及及び住民の日本語教育への理解の促進 【名称:バヤニハン～みんなで地域をつくっていこう～】	
取組の目標	・現在、当法人に届いている相談のうち、手を付けられていないものに対して重点的に取り組むことで課題として顕在化させる。顕在化することによって、「生活者としての外国人」を社会的存在としてとらえるよう、社会に働きかける。なお、寄せられている相談は、次の通りである。 ▶企業から、身分資格の外国人を雇用したい。 ▶企業から、消費者としてサービスの提供をしたい(とくに住宅・携帯が多い) ▶幼稚園教諭から、幼稚園にフィリピンルーツの園児の在籍が増えており、保護者との意思疎通が難しい。 ▶行政機関から、緊急時や安全面(防災、コロナ)に関する情報提供や、生活情報周知の協力要請。 ・「日本語教育の参照枠」における評価に示されているような「多様な評価方法」を一般の日本人にとっても参照しやすいよう、具体例を提示しながら地域住民に理解の促進を図る。 ・本取組で得られた成果は文化庁に報告し、新たに「つなひろ」の動画会場を設定として盛り込んでもらえるよう、相談する。 ・日本人住民も言語を学ぶ難しさを体感し、「生活者としての外国人」の気持ちに寄り添う。
内容	企業や関係者を講師として招聘し、要点を伝えていただいたり、質疑に答えていただいたりした。このようにフィリピン人参加者と身近な距離で話をしていただく機会を設けたことで、定住フィリピン人のニーズを知っていただいたり、私たちが行う地域日本語教育への理解・促進に努めたりした。企業や機関との事前の打ち合わせでは「つながるひろがるにほんごでのくらし」のパンフレットの周知を図り、「やさしい日本語」での接し方などについて、受講者とのやり取りに役立てていただいた。 ▶身分資格の外国人を雇用したい(双日オートグループ東海株式会社 Easy Car Ride 様／社会福祉法人天竜厚生会様) 車の販売に携わる通訳士、介護職従事者に求められる人物像や日本語力などについて話をしていただいた。 ▶消費者としてサービスを提供したい(第一伊藤建設株式会社様／双日オートグループ東海株式会社 Easy Car Ride 様) 住宅や車の購入に向けた準備として、一般的に必要な事項を教えていただいた。また、住宅についてはフィリピン人の施工事例を見せていただいたり、車については、ファミリーカーなどの動画を見せていただいたりした。こうした取り組みを通じて、新たな消費者に外国人のファミリー層を取り込んでもらえるよう、企業に対して市場開拓という観点からの共生社会への理解を促した。 ▶フィリピンルーツの園児保護者と意思疎通が難しい(浜松市立小松幼稚園様) 幼稚園では子どもの健康的な成長と安全を最優先するため、保護者と意思疎通を図りたいということを伝えていただいた。そのため、「やさしい日本語」や簡単な英語(単語混じり)でも良いので、子どもの迎えの際には会話に応じてほしいことや、連絡帳はローマ字でも良いので書くようにしてほしいことが伝えられた。なお漢字は求めないが、日本人の園児宅も読む「全園児対象のお便り」は、漢字にルビを振ることで対応している。そのため、ひらがなが読めると園としては助かることも添えられた。質疑では、就寝時間や食生活などについて、母国と日本の育児観の違いが鮮明となり、教員と保護者が互いに驚き合い

		ながらも意見交換する様子が見られた。 ▶フィリピン語スピーチコンテスト(共催:浜松市／後援:(公財)浜松国際交流協会・浜松市教育委員会) 浜松市最大級の国際交流イベント「はままつグローバルフェア」内で実施した。言語を学ぶ難しさを体感し、「生活者としての外国人」の気持ちに寄り添っていただく土壌を作った。コンテスト(日本人)が通訳士(当法人のフィリピン人スタッフ)と組み、オンライン上で複数回スピーチの練習をした上でコンテストに出場した。一般の聴衆にもこのようなコンテストと通訳士の一連のドキュメンタリーを垣間見せることで、多文化共生社会への理解や気づきを促進するという波及効果を狙った。									
実施期間	令和4年12月17日から令和5年2月12日			授業時間 ・コマ数			・1回3時間×2回＝6時間 ・1回2時間×6時間＝12時間 合計18時間				
対象者	在住フィリピン人はじめとする外国人			参加者			総数103人 (受講者80人、指導者・支援者等23人)				
カリキュラム案活用	Ⅱ住居を確保・維持する(小分類06,07) Ⅲ消費活動を行う(小分類08,09) Ⅴ子育て・教育を行う(小分類15, 16, 17, 18, 19, 20, 21) Ⅵ働く(小分類22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30) Ⅶ人とかかわる(小分類31,32) Ⅷ社会の一員となる(小分類35, 36) Ⅸ自身を豊かにする(小分類38, 39, 42, 43,44) Ⅹ情報収集・発信する(小分類46)										
使用した教材・リソース	なし										
受講者の出身(ルーツ)・国別内訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本	
									80人	23人	

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

取組事例①

【令和4年12月17日】住宅を購入する

ご家族での参加が一番見込めるクリスマスの時期に、第一伊藤建設株式会社様にご講義いただいた。受講者の関心事は、「定住者でも家を買うことはできるか」「ローンは月にいくらか」といった家賃との比較、「日本語があまり分からなくても、家を購入することは可能か」といった内容であった。講師としてお見えいただいた梅澤様より、「永住者で、勤め先がわかる保険証があれば住宅購入は可能だ」というお話があった。実際に住宅を購入したフィリピン人家族の事例をご紹介いただきながら、住宅購入に必要な書類や手続きの一例などもご説明いただいた。



取組事例②

【令和 5 年 2 月 12 日】フィリピン語スピーチコンテスト

▶周知を図るべく、広報活動に力を入れた。

- ・フィリピン語専攻課程のある大学との連携／静岡県立大学、大阪大学、東京外国語大学
- ・共催、後援としての連携（浜松市、（公財）浜松国際交流協会 HICE、浜松市教育委員会
- ・各所へ広報の協力依頼／（一財）自治体国際化協会（市民国際プラザ）、近隣の国際交流協会、取組4の受講者、スタッフのクチコミなど。

▶コンテスト同士が集まれる「顔合わせ」「打ち合わせ」「通訳士とのペア、マッチング」の時間を設けた。またグループメッセージを作成し、互いの健闘をたたえ合えるような雰囲気づくりに努めた。

▶コンテストは事前に話したい内容を日本語で考え、スマートフォンを使うなどして自身の持てる力でフィリピン語に翻訳した。それを、ペアになった通訳士が添削して原稿を作成した。

▶コンテストは通訳士の指導を受けながら、作成した原稿をもとに、スピーチスタイルになるように練習した。

▶このコンテストに参加することが、コンテストにとって「ナラティブ」としての表現する場になった。このことは、キャリア教育的な視点においても有意義であった。

▶ペアになった通訳士は、コンテストの発表を日本語で言い換える準備をすることで、二人三脚でコンテストに挑んだ。

▶コンテストと通訳士の関係性を、当日は一般聴衆にこのドキュメンタリーを見せた。これにより、聴衆にとってもコンテストを通して認知が刺激され深い学びにつながった。

▶ハイブリッド開催にしたことで、会場ほか市外、県外、国外からの視聴もあった。

▶意思疎通を図りながら、「ことば」を覚えて使う過程について、この取組に関わったすべての人たちが何かしら考える機会になった。

▶審査を待つ間に、参加者が「フィリピン語ワンポイントレッスン」を受ける機会を提供することで、このコンテストの持つ意義への理解を促進した。



（２） 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

・企業や諸機関から、「フィリピン人を消費者・労働者・市民として受け入れたい」という要望が、かねてより当法人に寄せられていた。一見するとこれらは要望だが、見方を変えると日本社会側からの相談と捉えることもできる。日本語教育の参照枠の3つの柱のうち、『生活者としての外国人』を社外的存在として捉える」というのがあるが、本取組を通じて「生活者としての外国人」のリアルな声を、相談者である企業や機関へ届けることができた。本事業による取組を通じた接点により、「生活者としての外国人」の存在や声を、顕在化できた。また、企業や幼稚園との打ち合わせでは、情報交換を通じて継続した関係性を築く機会にもなった。

・「言語を覚える難しさを体験しよう」という標語を掲げて実施した「フィリピン語スピーチコンテスト」については、浜松市最大級の国際交流イベント「はままつグローバルフェア」内で実施した。同イベントはコロナ禍を経て実に3年ぶりのオフライン開催となったが、本取組は今回ハイブリッドにて開催した。これにより、県内外のフィリピン語を専攻する大学と連携することができ、学生の参加に結びついた。また、自治体職員の参加（一例：警察の通訳者・自治体の幼児保育課職員、いずれもフィリピン人住民と接する機会があることから）、起業家の参加（フィリピンにルーツを持つが日本国籍であり、第二言語としてフィリピン語を学ぶ経験を持ち、日本語教師として日比を軸に起業している者）などと、バラエティに富んでいた。聴衆からは、「大変意義深いイベントをオーガナイズされたと思います。フィリピンナガイサの尊い活動に敬意を表します。おめでとうございます。」「フィリピンナガイサのみなさま、おめでとうございます。それから Maraming salamat po! とても楽しかったです。参加者のみなさんのスピーチは本当に感動的な話ばかりでした。それからパートナーのサポートや翻訳も素晴らしかったです。」「昨年も視聴しましたが、毎回レベルがアップしていますね！」「こんなにも熱意を込めてイベントを実施するのかと、感心しました。フィリピンナガイサの強いメッセージ性は教育的意義が深く、コンテストが自分のことを深く考えたり、成長できたりする学びの多いイベントだと思います。すばらしい。観覧者にとっても熱くこみ上げるものがありました。これからもこのグローバルフェアで安定的に実施し、成長できるイベントなりそうですね。ありがとうございました。」「お疲れさまでした。素晴らしいコンテストでした。皆、自分の思いをはっきりと伝えており、頼もしく、若い方々のご発表を聞いて、これから（の時代）も捨てたものではないなと思いました。」などのお声が寄せられた。

（3） 今後の改善点について

「つながるひろがるにほんごでのくらし」の新しいコンテンツ作成に至るような事例を作ることはできなかった。これは、各企業や幼稚園と話をする中で、Can-Do の枝葉が事例ごとに無数に分かれること、実際には通訳士を自社で配置したり、スマートフォンのアプリを使って対応しており、それで済んでいるということから、コンテンツ作成は難しいという結論に至った。実際に、日本語が A2レベルほどでも永住者であり保険証があれば住宅購入できている現状を踏まえて、日本語を使った Can do の設定の課題や難しさを知った。

任意の取組 【取組名： バヤニハン～みんなで全国に広げていこう～】	
取組の目標	「生活者としての外国人」のライフステージに寄り添い、自治体を連携して実施する日本語教育を、全国に広げる。オンライン開催にすることで、とくに、空白地域や日本語教育に関する団体を立ち上げたばかりの人材を取り込み、育成する。
内容	（第一期） 地域の活力向上・共生社会実現に向けた、自治体と連携して行う 「地域」日本語教育とは 定員 100 名 11 月 5 日① 13:00～15:00 「地域」日本語教育が目指す人物像とは ・松岡洋子氏（岩手大学国際教育センター教授） ・古橋広樹氏（浜松市国際課） 11 月 5 日② 15:30～17:30 日本語教育参照枠が目指す多様な評価と、シビックプライド ・安武伸朗氏（常葉大学造形学部造形学科教授） ・松井孝浩氏（文化庁国語課）

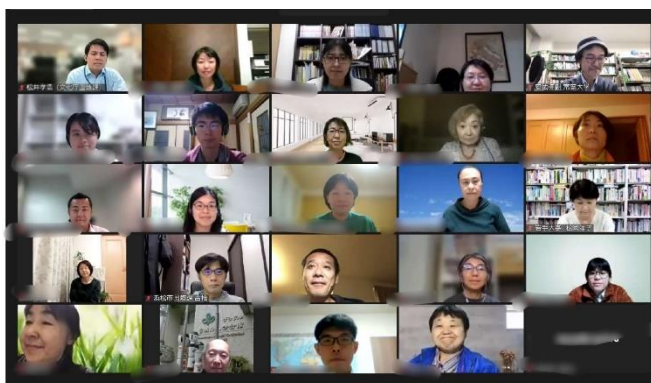
(第二期)「地域」の日本語教室活動の強みを考え、ライフ・キャリア支援に活かそう 定員 40 名 11 月 19 日① 13:00～15:00 フィリピンの教育事情 ・笠原礼子氏(フィリピン日系人会インターナショナルスクール) 11 月 19 日② 15:30～17:30 国と世代を超えた移民のライフキャリア支援について ・古賀依枝・島村菜々子(大阪 Minami こども教室) 12 月 3 日 13:00～15:00 キャリアコンサルタントと共に考える、日本語教師の自己理解 ・桑原祐介氏(株式会社ワークイズ代表取締役) 12 月 17 日 13:00～15:00 社会教育的な視点で考える。日本語教師の仕事理解 ・渋谷かさね氏(静岡大学教育学部准教授) 1 月 7 日、21 日 いずれも13:00～15:00 「地域」日本語教育活動実践のワーク ・有田玲子氏(東京にほんごネット)										
実施期間	令和 4 年 11 月 5 日 ～令和 5 年 1 月 21 日				授業時間 ・コマ数	1回 2 時間 ×8 回 = 16 時間				
対象者	日本語教育空白地域をはじめとする支援者、日本語教師				参加者	総数人 61 人 (受講者 50 人、指導者11人)				
カリキュラム案活用	特に該当箇所なし									
使用した教材・リソース	講師が作成した資料 「つながるひろがるにほんごでの暮らし」									
受講者の出身(ルーツ)・国別内訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
										50

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

取組事例①

【第2回 令和4年11月5日】日本語教育参照枠が目指す多様な評価と、シビックプライド 講師:安武伸朗氏(常葉大学造形学部造形学科教授) 「標準的なカリキュラム案」に、 ○ 日本語を使って、相互理解を図り、社会の一員として生活を送ることができるようになること ○ 日本語を使って、文化的な生活を送ることができるようになること というのがあり、「“社会の一員として”“文化的な”生活を送ることができるようになる」というような背景を考えた際、「シビックプライド」の研究・キーワードにヒントがあるのではないかと考えた。そのため、これについて地域日本語教育に新しい視点を入れるべく、講師を招聘した。安武教授から、「大学生たちが自分たちの住む街の地図を作成したり、住民と共にワークショップをしたりと、主体的にシビックプライド研究に励むことは、その研究自体が彼らのシビックプライドに結びついた。また、学生の取り組むその姿は、教員にも想定外の気づきが得られたことや、学生はそれら取組の延長として就職活動、就職へとキャリアを進めて行った」というお話を伺った。これは地域日本語教育現場での事例ではないが、受講者たちは大学生を自らの現場の学

習者に置き換えて、話を聞くことができた。また、これら一連の安武教授の取組から、教員自身にも気づき
が得られたとして、その内容を共有していただいたことも受講者たちの気づきにつながった。別途、アンケ
ートを提出する。

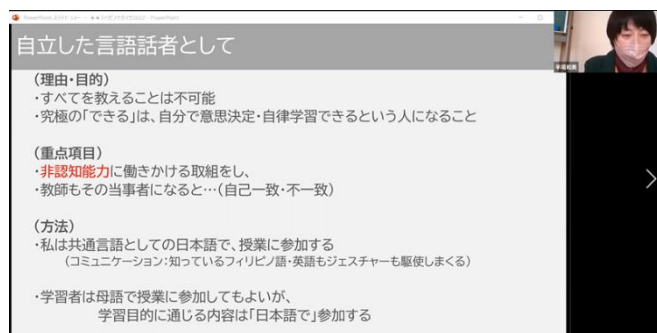


取組事例②

【第7・8回 令和5年1月7日、21日】「地域」日本語教育活動実践のワーク

講師：有田玲子氏（東京にほんごネット）

「地域日本語教室はコミュニティの基盤づくり」という標語を掲げて「ラポール」の重要性と「非認知能力」
を使った取組の効果について取り上げ、検討した。養成段階で学んだ理論のうち、地域の日本語教育の現場
において特に優先順位の高いと考えられるものを、ワークに盛り込むことで参加者に学びと気づきを促し
た。具体的には、令和4年度の12月までの当法人の日本語教室活動を事例として動画にて撮影し、それ
を受講者に共有しながら「指導の意図」を見える化し、考察した。日本語教師は対人援助職であることか
ら、ほかの対人援助職に根付いている理論も参考にした。今回は、マイクロカウンセリング技法に着目し、こ
のカウンセリングの流れを、日本語教育指導の在り方に应用できないかについても検討した。受講者同士は
パドレットやブレイクアウトルームなどを用い、情報・意見交換をしたが、アンケートではこの時間について
「良かった」というお声が聞かれた。講師の有田先生には、2020年度より毎年、本取組の締めくくりのコマ
をお願いしており、今年度も全国に支援者を送り出していただいた。別途、アンケートを提出する。



（2）目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

本講座の受講者の特色は次の通りである。

- ・受講者のリピート参加が多いこと。
- ・アンケート回答には、「はい・いいえ」だけでなく、文章でコメントや感想をご提出いただく方が多いこと。
- ・空白地域や他県・他市の各地で、「地域の日本語教室を立ち上げたい」と考えている人や、地域日本語教室
を立ち上げて間もない人の参加が目立ったこと。この中から実際に日本語教室を立ち上げた人や、令和5
年度の文化庁事業の応募をした受講者もいた。
- ・フィリピン人の子供、大人に携わっている支援者が多いこと。本講座（オンライン）への参加をきっかけにし
て当法人と関係を築き、その連携は年重ねるごとに全国規模に普及していること。

日本語教育は過渡期であり、行政と連携する地域日本語教育への関心が高まっている。受講者は知識を得た

いというより、「もっと、自分たちの現場について他団体の人たちと意見交換をしたい。現在持っている自身の知識を確認する場がほしい」というニーズがあるように感じられる。このことは受講後のアンケート回答や、参加申し込み時のやりとりから伺える点である。受講者のお声として、「講座の目の付け所が新鮮」「参加者への細やかな対応」を挙げていただき、このこともリピート参加につながっている点と言える。

(3) 今後の改善点について

上述の通り、受講者のリピート率が高いことから年度ごとの単発的な内容にならないよう、本事業の委託が続く限りは、前年以前を踏まえたカリキュラムに配慮する。さらに一連の流れの中に、新規受講者を一層取り込んで普及できるよう、下記、検討する。

- ・講座を二期に分け、一期を公開とし、地域日本語教育への新しい視点や行政との連携などが聴講できるよう広く人材を取り込むこと。二期では、受講者、講師、事務局がそれぞれ近い関係で学びを深められるものと、展開を工夫していく。
- ・本取組は単なる公開講座ではなく、「日本語教育に関わる人材の養成」の公開講座であるという理解の元、一連の流れを把握したメイン講師を配置する。メイン講師とコーディネーターが連携のもと、人材育成、指導に携わるようにする。
- ・時間と場所、予算の許す限り、ハイブリッド開催とし、地元の日本語教育人材の育成にも力を入れる。

任意の取組 【取組名:バヤニハン～私たちの地域の特定のニーズをとらえよう～】										
取組の目標		・浜北地区のフィリピンをはじめとする定住外国人の特定のレディネスやニーズを知り、日本社会との接点をつくること。 ・日本社会との接点を有機的に結ぶため、令和 5 年度に調査を実施する予定である。そのための準備として、ヒアリングの対象と項目を検討する。								
内容		本取組は下記について意見交換、検討した。 ① 浜北地区の実情と課題を整理した(住宅購入、就労について重点的に) ② 日本語教育という支援でカバーできない「生活者としての外国人」の若い世代について、社会保障・福祉という観点の必要性について話しあった。 今回は上述①のうち、とくに住宅購入に関する実情を把握し、重要な契約においては海外の事例などから、通訳士の配置の必要性を認識した。								
実施期間	令和 4 年 9 月 22 日 ～令和 5 年 3 月 13 日			授業時間 ・ コマ数		1回 2 時間×2 回＝6 時間				
対象者				参加者		委員 9 人				
カリキュラム案活用	Ⅱ 住居を確保・維持する(小分類06,07) Ⅲ 消費活動を行う(小分類08,09) Ⅴ 子育て・教育を行う(小分類15, 16, 17, 18, 19, 20, 21) Ⅵ 働く(小分類22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30) Ⅶ 人とかかわる(小分類31,32) Ⅷ 社会の一員となる(小分類35, 36) Ⅸ 自身を豊かにする(小分類38, 39, 42, 43,44) Ⅹ 情報収集・発信する(小分類46)									
使用した教材・リソース	なし									
受講者の出身(ルーツ)・国別内訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

取組事例①

【第1回 令和4年9月22日】

浜北地区の在住フィリピン人に住宅販売の実績がある、第一伊藤建設株式会社、住宅事業部の梅澤雄喜様からお話を伺った。別途、議事録を提出する。



取組事例②

【第3回 令和5年3月13日】

上述の第一回、第二回(株式会社一条工務店 浜松本社総務グループより富田斉様に技能実習生のリーダーとしての定住外国人の存在について、お話を伺った)と、当法人に近隣の企業や諸機関から寄せられているフィリピン人に関する相談について話し合った。内容が多岐にわたったため、今年度はとくに、言葉がわからないまま重要な契約をすることについての課題を挙げ、契約時の通訳士の必要性について話し合った。

(2) 目標の達成状況・成果(取組による特定のニーズの充足)

当法人に寄せられていた企業や行政をはじめとする機関からの相談のうち、いくつかは本事業を通して時間をかけて話し合う機会が持てた。

- ・住宅購入について。
- ・技能実習生を束ねる役目の「生活者としての外国人」の雇用について。
- ・日本語教育だけではカバーできない、特別な配慮を必要とする「生活者としての外国人」の若い世代たちの存在と、専門機関との連携について。
- ・「生活者としての外国人」が集住している地区の幼稚園の現状について。

中でも、実際に企業の方を委員としてお招きし、具体的なお話を伺えたことは、大変貴重な機会となった。これまで当団体の周りでも住宅や車などの大きな買い物をしているのを見てきており、それはただ単に喜ばしいことだと捉えていたが、もしかしたら当事者も見過ごしている重大な課題があるのではないかという気づきを得た。

(3) 今後の改善点について

とくに、当法人は平成29年度の調査(文化庁の本事業委託)以降、住宅購入する「生活者としての外国人」が出始めており、それは感覚的に「定住の意思があり、安定した生活を送る上で良いことだ」と位置付けてきた。実際、住宅メーカーに親身になって住宅購入以外の日常生活に関することも支援してくれる営業担当者の存在があり、このことは施主となった外国人にとってとても大きい。しかし、「生活者としての外国人」の滞在が長期化し、定住している今、住宅を購入は当たり前という時代になりつつある。重要な契約を伴う住宅購入をはじめとする大きな買い物については、福祉としての観点から、通訳士を伴うことを必須とするなどのサポートを得た上で行われるのが本来の姿ではないだろうか。これについては、関係機関に通訳士の必要性を伝え改善を促していく。このようにして当たり前のように行われていることを見過ごさないよう、問題点を顕在化させ、社会にも働きかけていく。

4. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

定住フィリピン人がコミュニティ内に埋没するのを防ぐこと。

・文化庁日本語学習動画サイト「つながるひろがるにほんごでの暮らし」を使って、体験と地域住民との交流を通じた日本語教室を展開し、日本社会の中で「できること」を増やすこと。

・公的機関が発信する「やさしい日本語版」の生活情報をレアリア教材に取り入れ、周知を図ること。

・いずれの教室活動の中でも自律学習のアドバイスを取り入れ、教室の外でも学習者が学べる力をつけること。

・フィリピン人が集住する地区に教室を設置し、生活情報を題材に地元住民との交流を図ること。

・公的機関、企業、住民等に連携を働きかけ、多様化している外国人の来日背景や在留資格などの状況を、地域全体はもとよりオンラインを使って全国規模で理解できるよう普及を図ること。

(2) 特定のニーズの充足に向けて試行した方法

① インテーク面談(初回面談)や情報提供の重要性と、日本語学習機会提供の補完関係

当法人は市内でも珍しい、フィリピン人に特化した相談に応じていることから、市内各地のフィリピン人が頼りにして訪ねてくる。また、中区クラスは市中心部へのアクセスの良さがあり、近隣市・県のフィリピン人の来訪も珍しくない。しかし、訪問理由は他にもあるのではないかと分析した。それは「生活者としての外国人」が日本社会の中に、それぞれに適した形態で集まって頼りにできる場所が少ないということが考えられ、彼らが気軽に相談できる場を、自治体が運営する相談窓口よりも地域の日本語教室に求めているのではないかとということである。こうした背景から、中区クラスは相談窓口としての機能(専任者を付ける)と、個別学習のための複数グループ(地域住民や、フィリピンにルーツを持つ高校生・大学生を支援者として)を併せ持つ形式で実施した。

② 対象者の広がり、新しい展開

▶一つ目は人材育成講座についてである。「地域日本語教室はコミュニティの基盤づくり」という標語を掲げて「ラポール」について取り上げ、検討した。まずは当法人が令和4年12月までの授業の中で教育実践という形でこれに取組み、それをサンプルとして動画に収めた。1月7日・21日に実施した人材育成講座では、これらをたたき台として参加者と視聴し、指導の意図という視点で意見交換や議論を行った。ラポールを考える上で、日本語教師は対人援助職でもあることから、ほかの対人援助職からもヒントが得られるのではないかと考え、キャリアコンサルタントが相談で用いる「マイクロカウンセリング技法」を参考にした。これによって、指導者の心構えや授業のあり方を参加者に話題提供し、日本語教育で参考になる部分はないかについてパドレットやブレイクアウトルームで議論したり、個人ワークを通して理解を深めたりした。

▶二つ目は浜北クラスについてである。このクラスでは指導者がチームティーチングし、授業の準備・振り返りにあたった。偶然にも、静岡県立文化芸術大学より依頼を受け、ここに日本語教員養成課程の教育実習生を受け入れることになった。そのため、浜北クラスでは養成段階・初任段階・中堅段階の指導者が集うことになった。浜北クラスでは「教案の型(どの段階の指導者でも、骨組みに沿って進行できるもの)」と「ポートフォリオ」を軸に据えて、学習者の学びと教師の成長を「見える化」した。これによって、準備や振り返りの段階でも、各指導者間で共有しやすいように工夫した。

▶三つ目は「言語を覚える難しさを体験しよう」という標語を掲げて実施した「フィリピン語スピーチコンテスト」についてである。この取組はコンテスト(日本人)が通訳士(当法人のフィリピン人スタッフ)と組み、オンライン上で複数回スピーチの練習をした上でコンテストに出場した。その練習の過程においては、衝突も少なからずあるが、しかし日本語に限らない、「言語を使う意味」「言語を覚える体験そのものの難しさ」などを、全員が実体験から学べるよう企画した。コンテストは浜松市最大級の国際交流イベントである「はままつグローバルフェア」(主催:HICE)と連携して実施したが、一般の聴衆にもこのようなコンテストと通訳士の一

連のドキュメンタリーを垣間見せることで、多文化共生社会への理解や気づきを促進するという波及効果を狙った。

(3) 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

① インテーク面談(初回面談)や情報提供の重要性と、日本語学習機会提供の補完関係

インテーク面談(初回面談)から日本語学習のグループに移行し、毎週、中区クラスに通うようになった者もいれば、それぞれのグループにおいて、日本語学習の合間に支援者や仲間に生活上の悩みや相談を気軽打ち明けられることを励みにして通う者もいた。

なお、インテーク面談(初回面談)で顕著なのは、子どもの呼び寄せに関する内容だった。この特定の相談に応じるためには母国の教育事情の把握と呼び寄せ後の子供の教育支援に具体性を持って関わる必要があるが、自治体の相談窓口や行政書士では一時的な支援に過ぎず、対応しきれていない現状がある。一見すると「呼び寄せ、来日に関する相談」であるが、私たちはこれを「教育相談」と捉えているため、相談者のライフ・キャリアに継続して関わる事ができている。このような繋がりから日本語教室の場の折々に触れて、彼らの生活に必要な情報提供をしたり、対象者別の日本語教室などへ橋渡ししたりするなどした(就学、就職、他組織・団体が主催する生活者対象の教室)。

いっぽう、最近ではフィリピン人の相談に応じる全国の自治体、相談窓口の担当者、支援者からの相談も頻発しており、令和4年度はそのような対応に追われ続けた。さらにコロナ禍を経て、自治体側から「とくに定住外国人に啓発・普及してほしい案件」が寄せられるようになっていた。そのため教室に学習者が集まる機会を捉えて、情報提供や資料媒体を教材に使うなど工夫した。これについては中区クラス、浜北クラス同様に配慮、実施した。

コロナ収束後、フィリピン人の若年層来日の再開と、日本社会側からの要望の集中が加速度的に増え、本事業を中心として、当法人はますます「ハブ」の役目を期待されていることを実感した一年であった。

② 対象者の広がり、新しい展開

▶一つ目は人材育成講座についてである。本講座の受講者の特色は次の通りである。

- ・受講者のリピート参加が多いこと。
- ・アンケート回答には、「はい・いいえ」だけでなく、文章でご提出いただく方が多いこと。
- ・空白地域や他県・他市の各地で、「地域の日本語教室を立ち上げたい」と考えている人や、地域日本語教室を立ち上げて間もない人の参加が目立ったこと。この中から実際に日本語教室を立ち上げた人や、令和5年度の文化庁事業の応募をした受講者もいた。
- ・フィリピン人の子供、大人に携わっている支援者が多いこと。本講座(オンライン)への参加をきっかけにして当法人と関係を築き、その連携は年重ねるごとに全国規模に普及していること。

日本語教育は過渡期であり、行政と連携する地域日本語教育への関心が高まっている。講座後のアンケートから、受講者は単に知識を得たいというより、「もっと、現場について意見交換をしたい。現在持っている自身の知識を確認する場がほしい」というニーズがあるように感じられる。本講座は聴講型の公開講座に留まらず、「人材育成」の公開講座であることを意識し、事務局と受講者が双方向に連携できるよう努めた。具体的には講座ではパドレットやブレイクアウトルームを用いて、講座以外ではメーリングリストを作成したり、折に触れてオンライン会議システムで相談(「フィリピン人の相談に応じているが、その対応方法がわからない」という相談者の相談)に応じたりした。このことが、受講者のお声として、「講座の目の付け所が新鮮」「参加者への細やかな対応」という評価に結びつき、リピート参加につながっている点だと考える。

▶二つ目は、浜北区クラスについてである。学習者はポートフォリオによって、自身の学びの記録を残すことができた。ポートフォリオについて、ある学習者が授業のスピードについて行かためローマ字で記入したが、次の授業の時には自宅で余白に平仮名や漢字で埋めて持ってくるということがあった。また、各回のポートフォリオを記入するだけでなく「ファイリングする時間」も設けた。授業前や休憩時間にそのポートフォリオを嬉しそうにめくりながら、学習者と支援者が談話する姿も多く見られた。こうした関係性づくりが、学習者の能動的な学びへの後押しにもつながり、(公財)浜松国際交流協会が発行する「漢字練習帳」を購入し、自主学習に使う者や、JLPTの受験を目指す者が現れたりした。浜北クラスでは指導にあたった人材が、学習者の能動的な学びを後押しするとはどういうものか、地域日本語教室における関係性づくりの意義はどのようなものかといった点に注意が向き、OJTの機能も果たしたと考えている。

▶三つ目は「言語を覚える難しさを体験しよう」という標語を掲げて実施した「フィリピン語スピーチコンテスト」についてである。聴衆から、「大変意義深いイベントをオーガナイズされたと思います。フィリピンナガイサの尊い活動に敬意を表します。おめでとうございます。」「フィリピンナガイサのみなさま、おめでとうございます。それから Maraming salamat po!とても楽しかったです。参加者のみなさんのスピーチは本当に感動的な話ばかりでした。それからパートナーのサポートや翻訳も素晴らしかったです。」「昨年も視聴しましたが、毎回レベルがアップしていますね！」「こんなにも熱意を込めてイベントを実施するのかと、感心しました。フィリピンナガイサの強いメッセージ性は教育的意義が深く、コンテストが自分のことを深く考えたり、成長できたりする学びの多いイベントだと思います。すばらしい。観覧者にとっても熱くこみ上げるものがありました。これからもこのグローバルフェアで安定的に実施し、成長できるイベントなりそうですね。ありがとうございました。」「お疲れさまでした。素晴らしいコンテストでしたね。皆、自分の思いをはっきりと伝えており、頼もしく、若い方々のご発表を聞いて、これから(の時代)も捨てたものではないなと思いました。」などのお声が寄せられた。コンテストとしての応募状況も広がりを見せており、2 度目の今回は県内外のフィリピン語を専攻する大学の教員と連携することができた。これにより、大学生の参加が著しく増えた。さらには自治体職員の参加(一例:警察の通訳者・自治体の幼児保育課職員、いずれもフィリピン人住民と接する機会があることから)、起業家の参加(フィリピンにルーツを持つが日本国籍であり、第二言語としてフィリピン語を学ぶ経験を持ち、日本語教師として日比を軸に起業している者)などと、バラエティに富んでいた。

これまでの本事業委託を通じて、主に地位等類型資格者のフィリピン人に対して行ってきた日本語指導、生活相談等の経験を、令和 4 年度はそのまま活動類型資格者やフィリピン人以外の人々にも移行して対応の幅を広げることができた点である。対象者の広がり、行政と連携して実施する事業(「離転職者向け『公共職業訓練』静岡県立浜松技術専門校委託『定住外国人向け訓練』」、「浜松市体制づくり推進事業」)の受託によるものである。令和 4 年度の実績としては本事業、それ以外の事業あわせてペルー、ボリビア、メキシコ、スペイン、パキスタン、ナイジェリア、インドネシアの人たちの在籍があった。在留歴の長い地位等類型資格者のフィリピン人のうち、知見、素養を生かした人も現れており、そのような人たちが多様な国籍、在留資格者の人たちの支援にあたっている。このように、先の移住者が後からやってくる移住者の支援にあたるような場が、新たなコミュニティの誕生を捉えることにも努めた一年であった。今後はこれまでの経験を活かしつつ、在留資格の枠を超えて、教室活動を展開していく。

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果等

中区クラスや浜北区クラスを通じて、行政や大学、企業と特に連携を深めることができた。さらに、当法人に所属する、フィリピンにルーツを持つ高校生や大学生が住民の一人として、また社会貢献として本事業に関わる土壌ができつつある。これは、この事業を長い年月かけ、彼らの保護者と「生活者としての外国人」のための日本語教育事業で接点を持っていた成果だと考えられる。また、このような私たちの「場」を見守るようなネットワークが日本社会の中にもできつつある。例えば令和 4 年度は、行政、大学、企業の方から、当法人にお声を掛けていただき、連携を求められる機会が以前にも増して増えた。とくに企業からは、企業が「消費者を育てる」「勤労観を育てる」という観点から、フィリピン人と繋がりを求めるというご相談であり、「外国人を使う」というような問い合わせは著しく減少した。いっぽう、当法人側からこれらの機関に連携や相談の依頼をした場合においても、快く応じていただけていることが多い。例えば、令和 5 年度以降の授業へのご登壇や場所の提供に関する依頼などの相談に応じていただき、このことは次年度への事業拡大、つながりに至っている。

(5) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

・フィリピンナガイサが運営・管理しているSNSやホームページ。
・近隣の市町の国際交流協会が運営・管理しているSNS。
・(一財)自治体国際化協会・市民国際プラザが運営・管理しているSNS
など。しかし、動員に最も効果があったのはスタッフ私用のSNSによる発信やクチコミである。

なお、学習者の募集、授業報告については、フィリピンナガイサが主催する Facebook が有効であった。毎週土曜日の活動直前・直後に教室の様子を上げていることから、金曜日夜、土曜日夕方にアクセスが集中している様子が管理画面から見受けられる。

人材育成講座については上述の他、昨年、本事業で作成したメーリングリストへの周知、報告などの発信を行った。フィリピンナガイサのホームページに人材育成講座の詳細を報告することで、講座の内容の充実なども汲み取ってもらえるよう図った。情報が流れないホームページを起点とし、メーリングリストやSNSを介してシェアするよう努めた。また、ホームページを活用することは、SNSと違って情報が流れないという利点がある。これは特に大学の研究者・学生や、フィリピン人と接する日本人からの問い合わせに多いのだが、「浜松 フィリピン」で検索されることがある。これは投稿直後に効果が表れるというものではないが、年数を経過してもなお、団体の存在がコミュニティに埋没しないことにつながっている。

（６）改善点、今後の課題について

「地域社会の創出」に向けた地域日本語教育を担うための人材育成の必要性

昨今、地域日本語教室は「社会参加のための言語保障」として日本語を学ぶ機会を提供する役割と「地域社会の創出」として、新たな外国人生活者を地域社会に取り込むための居場所やハブを提供する役割を担っているとされている。

「社会参加のための言語保障」については、「日本語教育の推進に関する法律」が施行され、生活するために必要な日本語を学ぶという目的のもと、「日本語教育の参照枠」、「生活 Can do」などが整備されている。このように、目的達成のためにどのような活動が求められているかの指針が存在する。

一方で、「地域社会の創出」については、外国人が多く住む地域で地域日本語教室は大きな役割を担ってきているものの、現状では、その価値を可視化できる明確な指標がないため、これを担っている地域日本語教室の価値を見出しにくい。今後も地域日本語教室に「地域社会の創出」を期待するのであれば、明確な指針や指標が必要であると考ええる。

当法人は、本事業の目的を、「定住外国人がコミュニティ内に埋没することを防ぐこと」と設定している。これは新しい地域社会を作ること（＝地域社会の創出）と直結しており、この目的のもと、事業を継続することの必要性を感じている。そして、この「地域社会の創出」を目的とした地域日本語教室をどのように作り上げていくのか、を考えることが、地域日本語教育に求められている専門性であると考ええる。具体的には以下の３点の専門性が挙げられる。

- ・地域住民を取り込む方策。
- ・地域社会を作る視点での企業との連携。
- ・ソーシャルビジネスとして地域日本語教室をとらえる視点。

地域社会創出という目的のもとにおいては、その地域社会創出をする人々（日本人市民も外国人市民も運営者も全て）への働きかけが求められる。よって、地域社会創出という目的のもと行われる地域日本語教室を担う人材の専門性には、関わる全ての人々（自身をも含む）のライフステージにも目を向け、コーディネートする力が求められると考える。どのような人材が地域日本語教育を介して、地域社会を創出するのかということを踏まえ、今後の新しい日本語教員養成・研修課程の各段階・各分野においては「キャリアデザイン」の単元を新たに取り入れていただくことを希望する。

次に、企業との連携についても、近年は「企業努力として地域日本語教育に関わる価値がある」という視点から、当法人に連携を求められる機会が増えている。（このことは良き企業人、ひいては広く市民教育として捉えることもできる）地域の企業と共に地域社会を作る視点を持って連携することが必要とされている。

最後に、これらの専門性を培う土台づくりとして、地域日本語教育にキーパーソンとして従事する者においては、従来の日本語教師という職務理解の枠を超えており、マインドセットが必要になっている。ビジネスという視点での連携、組織運営という点についても、新しい日本語教員養成・研修課程に盛り込まれると良い。ただし、これらを養成・育成課程で身に付けたからといって、事業を軌道に乗せるのは難しい。地域社会を作るという意味での地域日本語教育の活動の必要性は、国や地域の事情にも関わることから、行政によるスタートアップ支援や資金面での支援（予算確保）が重要である。

1人1人の社会人人生が長期化している一方でグローバル化や変化の激しい昨今、社会教育・市民教育としての地域日本語教育が確立され、維持することは、地域社会において喫緊の課題となっている。そのため、社会の中に風化し、埋没してしまわないよう、地域日本語がソーシャルビジネスとして足腰を鍛える機会が提供されるとよい。全国に当たり前のように地域日本語教育がソーシャルビジネスモデルとして確立される時代が近いことを感じており、拡充されることを願っている。